魔王絶唱オーマシンフォギア

ヴェルザ・ダ・ノヴァ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、『平成』の時代を駆け抜けた２０の仮面ライダー達。その力が今、新たな世界に受け継がれる。

祝え!!新たなる第二の王の誕生を。

不定期投稿なのでよろしくお願いします

目次

転生と初陣 ―― 1
時間旅行！過去改変！ ―― 9
響！初めてのライブ！魔王の怒り!!
20
いざ二課へ！奏の心機一転！ ―― 32
魔王。テレビ局に突撃!! ―― 47
クリスと原作開始と教師 ―― 54
未来、二課へ ―― 61

転生と初陣

「誠に申し訳ございません!!」

ん？これどういう状況？いつのまにか変な白い世界？みたいな場所にいて、俺の目の前では女神みたいな格好した女性がいる。

「あ、「女神みたいな」じゃなくて本物の女神です」

心読んだ!?ってちょっと待てよ。

「なんで俺に謝ってたの？」

「私のミスであなたを死なせてしまったんですぅ！」

「うん、そんな気がしてたよ。本当は俺じゃない他の誰かが死ぬはずだったんだのに間違えて俺が死んだのね。」

とは言っても俺、死因覚えてないんだけど…

「ですので、あなたを転生させます！」

「え？マジで？」

「マジです！特典も三つつけます！」

おお、特典三つはありがたいな。

「ちなみに転生先は『戦姫絶唱シンフォギア』という世界です」

・　・　・　え？嘘だろ!?マジかぁ、モブに厳しいあの世界かぁ、なら

「じゃあ、この特典でお願いできますか？」

俺が頼む特典は、

・オーマジオウの力

・なんでも作れるラボ

・天道さん並みの家事能力（料理を特に能力あてて）

この三つである。理由を言うと、まず一つ目、あんなヤベーイ世界ならこれぐらいの力がなきゃヤベーイんです。次二つ目、これは物作りが趣味だったからだ。バイクとか作れたら最高じゃね？（ライダーなのでバイクあるんだけど……）イヴェルうるさい。これは男の浪漫よ、浪漫！（あ、そうですか）最後の三つ目はとりあえず家事ができればなぁと思ってこれにした。

「では、この書類にサインをお願いします」

そう言われて俺は紙にサインする。

「はい！では第二の人生をお楽しみください！」

そう言われると俺の周りが光だして夢から覚めるような感覚と共に目を覚ます。

「あ、間違えてＴＳした主人公に憑依転生する書類にサインさせちゃった!?」

その頃、転生した立花響はというと

「なんでだあああああああああああああああああああああああ!?」

自分の部屋で叫んでいた。ご愁傷様です。

いやぁ、皆出かけててよかった!おかげで叫び声聞かれずに済んだからね!しかしあの駄女神ぃぃ!やりやがった。まぁ、ちゃんと確認しなかった俺も悪いけどね。とりま、家を探検したりしますか。

結果わかったもの

・自分の歳が１７歳

・念じると異空間にラボができる。

・オーマジオウのベルトはちゃんと出せる。

・バイク免許もある。（ｓｓおなじみの御都合展開）

とりあえずこんなところかな?しかしマジかぁ。原作の二年前だったとは……（つま

りオリ主は風鳴翼より一つ歳上）はぁ、この時点で原作が変わってるよ。よし、それじゃ次ｈ、っていきなりのノイズ警報ですか……いや、ポジティブ思考ポジティブ思考！オーマジオウの力を試せると思えばいい！

「よっしゃ、行くか！」

場所変わって二課では赤髪の巨漢〈風鳴弦十郎〉がヘリに乗っている〈風鳴翼〉と〈天羽奏〉に指示を出していた

「翼！奏！もう少しでノイズの発生ポイントだ！」

「了解です。司令」

「よーしっ！頑張りますか！」

そんな中一つの報告が舞い込んできた

「ノイズとは別の謎の高エネルギー反応を検知しました！」

その報告に二課の技術顧問である〈櫻井了子〉がエネルギーの解析および照合を急ぐよう指示するが何にも当てはまらない。それと同時にノイズの反応が減ってきている

「旦那、どうかしたか？」

「翼、奏！現場に急ぎ行き謎のエネルギーの正体を確認してくれ！」

その指示に翼と奏は了解とうなずき現場に急いだ。

二課でのやりとりがあった頃、響はというと

「じゃ、やりますか」

そう言うと重い鐘のような音を鳴らし腰にオーマジオウドライバーが巻かれる。そして、ヒーロー（仮面ライダー）なら誰もが口にするあの言葉を叫ぶ。

「変身!」

響はそう言ってドライバーの右側の装飾『オーマクリエイザー』と左側の装飾『オーマデストリューザー』を同時に押し込む。

祝福の時!!

最高!

最善!

最大!

最強王!

オーマジオウ!!

その変身音と共に黒のアンダースーツ『ノーブルアジャストストライクスーツ』に身を包み、『オーマラディアントアーマー』などの黒色と金色の装飾のようなアーマーを身

に着け変身が終了する。その姿は正しく威厳ある王のそれだった。オーマジオウに変身した響は自分の両手を見て握っては開くを繰り返す。

「まず、変身は問題無し。次は戦闘」

そう言って響は『ジカンギレード』と『サイキョーギレード』を召喚し合体させ『サイキョージカンギレード』と言う魔王剣にしノイズとの交戦を始めた。しかし、圧倒的なパワーの上にノイズは為す術もなく斬り倒され、後に残ったのはノイズが炭化したあとだった。

「よしっ！戦闘も問題無しだな。って今気付いたけど俺、声が○山力也になってんだけど戻せるかな？」

そんな事を自問自答していると上からローター音が聞こえ、響が上を見上げると二課のヘリがやってきていた。

（ヤッベ！二課来ちゃった）

そんな事思っているとヘリから2人の少女が飛び降りできた。

〈Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ〉

〈Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ〉

「なぁアンタ、一つ聞いていいか？ここにいたノイズはアンタが倒したのか？」

「……いかにも。この私が倒したが何か悪いか？」

「いえ、では我々に御同行願えますか」
「ふむ。私にはまだやることある。なので今日はお断りしよう」
〈クロックアップ〉
響はそう言ってクロックアップして逃走する。それを止めようと翼と奏は駆け出すがさすがの装者も音速並みの速度には勝てず取り逃がしてしまった。

その後、一課と二課の職員が到着し炭化したノイズの後始末を行った後、翼と奏は二課に帰投し、コーヒー片手に話していた。
「何者なんだろうな、アイツ。なぁ、翼」
「えぇ、あの強大な力。上から見ていても途轍もなかった」
(それに、あの剣。隙がなかった)
「そういやそろそろだったな」
「え？何が？」
「「何が？」って、あたしら《ツヴァイウィング》のライブ！」
「ああ、そういえばそうね」
「あのライブは《ネフシュタンの鎧》の起動実験も兼ねてるからなぁ」
「えぇ、頑張らないと！」

そうして2人は世間話をやめ自宅に帰っていった。

時間旅行！過去改変！

どうも、立花響だ！

翼さんと奏さんから逃げてきたはいいものの、家に帰るまでが大変だった。何があったかと言うと、前回現れたノイズって午後二時頃に出てきたのね。で、「俺まだ昼食ってなかったな」と思ってファミレスで昼すますでしょ。で、その後レンタルＤＶＤ借りたりして家に帰る頃には夜だったのね。で帰路についてた時に角曲がったらばったり昔馴染みに会うみたいな感覚で翼さんがいたんだよ！マジでビックリした！おまけにあの人、響の名前知ってたんですけど!?おーい！女神ぃぃぃぃこれどういうことおおおおおお!?

（すみません！風鳴翼の家が隣と言うことを忘れてました！でも、シンフォギアの推しキャラ翼さんだからよかったじゃないですか！）

よかねぇよ！そんなビックリ設定があってたまるか！おまけに本当に翼さんお隣さんだし…

え？ノイズ倒しに行く時気づかなかったのかって？家を出る時は早く行こうって家の周り見る暇なかったんだよ！

おまけに俺、どうやら弦十郎さんに鍛えられてるみたいで、スマホみたら電話帳に弦十郎さんのメルアド書かれてた。

モウ何来テモ驚カナイ。（※この言葉がのちに嘘になる）

で、その後ラボでいろんな物を作（創造した）てた。まず『ジクウドライバー』をを二つ。これはゲイツ用と予備で作った。実際俺のジクウドライバーはあるから、ある意味俺は今変身ベルトを3本持ってる計算になる。（オーマジオウドライバー含めたら4本）次に、『ブランクライドウォッチ』を作った。その時にわかったことがある。このラボ、生産ラインが作れるのだ。つまりは、いちいち手間かけてブランクライドウォッチ作る必要がない。つまり楽ができる！生産を止めるのは念じればいいだけだから、ホント楽！サンプルとして一個作ってからじゃなきゃ量産できないけどね。で次に我が家臣『カッシーン』を作った。ダジャレじゃないよ！公式で本当にカッシーンって名前なんだよ！　これもライドウォッチと同じ方法で。

それで結果的にブランクライドウォッチを１０個、カッシーンを２０体作って、そこで力尽きて寝た。

で、翌朝の現在！俺は今タイムマジーンを使って過去に飛んでいる。行く時代はもちろん！セレナちゃんがいるＦ．Ｉ．Ｓ時代！

２０３８年　Ｆ．Ｉ．Ｓ研究所

そこでは一体の白い巨体が大暴れしていた《ネフィリム》という自立型完全聖遺物である。それを止めるために1人の少女が命をかけて歌を詠おうとする。
「やめて！姉さん!!」
「ごめんね、セレナ…」
そして姉さんと呼ばれた少女〈マリア〉は禁断（絶唱）を詠おうとするところにネフィリムがマリアへ拳を振り上げ、叩き潰してきた。
「グオオオオオオオオオオ!!」
（ヤダ、嫌だ。死にたく、ない！誰か）
「助けて！」
〈アーマータイム！ドライブ！ド・ラ・イ・ブ～！〉
そこへ、ドライブアーマーを纏った響がスライディングしながらマリアをお姫様抱っこしてネフィリムの拳を避け、物陰に隠れる。
「え？私、死んでない？」
（なんで、マリアさんが絶唱しようとしてるの？原作だとセレナちゃんだったよね？ま、いいか。それより）
「ちょっと、大丈夫？」
混乱しているマリアに響は目の前で手を振りながら話かけた。

「へ？　だ、大丈夫よ。でも、なぜ私をたすけるの？」
「……助けを求める声が聞こえた。だから来た。じゃ、ちょっと待ってて！」
「えっ!?ちょっ!?」
マリアは響を止めようとするが響の走る方が早く、ネフィリムのいるところへ走り去っていた。
「さ～て、おい！　ネフィリム！　王の本気を見せてやろう」
そう言いながら響はドライブライドウォッチを外し、黄金色の『グランドジオウライドウォッチ』取り出し起動させる。
〈グランドジオウ!!〉
そこから、グランドジオウライドウォッチをジクウドライバーにセットすることにより、響の後ろに『ライダー』と書かれた城のような形をした時計台と２０体の平成仮面ライダーの石像が現れる
〈アークルの音〉〔オルタナリングの音〕アドベント！ＣＯＭＰＲＥＩＴ！ターンアップ！
〔音角の音〕ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ！ソードフォーム！ウェイクアップ！
カメンライド！
サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！３・２・１！

シャバドゥビタッチヘンシーン！ソイヤッ！ドライブ！
カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！ライダータイム！〉

「変身ッ!!」

音声が終わり響はジクウドライバーを３６０度回すことにより２０体の石像が後ろに現れた『ライダーレリーフ』に収納、縮小し響の周りに浮かぶ。

〈グランドタイム!!〉
〈クウガ・アギト・龍騎・５５５（ファイズ）・ブレイド！
響鬼・カブト・電王！キバ・ディケイド！
ダブル！オーズ！フォーゼ！
ウィザード！鎧武・ドラーイーブ！
ゴースト！エグゼイド！ビ・ル・ドー！〉
〈祝え!!〉
〈仮面ライダー!!グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！〉

音声と共に響には黒のアンダースーツ『Ｇストライクスーツ』に身を包み黄金色の鎧『グランドアーマー』を身に付け、その上にライダーレリーフが装着される。最後に頭部アーマー《グランドキャリバーＡ》の上に『仮面ライダージオウ』のライダーレリーフを装着、城に書かれた『ライダー』の文字が飛び出しグランドキャリバーＡに装着され

視覚機能を果たす『インジケーションアイ』となり変身が完了する。
（ウォズ役決まってないので今回は僭越ながらイヴェルがやらせていただきます
祝え！　全ての平成仮面ライダーの力を手に入れ、最強の称号を得た。
その名も仮面ライダーグランドジオウ!!　今この場に降臨した瞬間である！）
（お疲れ様です。イヴェルさん）
（響くんやっちゃいなさい。女性に手を出すヤツは例え創作物であろうと許さん！）
（なんだよその、某海賊アニメに出てるグル眉コックみたい騎士道は…）
〈龍騎〉
そう思いながら響は龍騎のライダーレリーフに触れ起動させることにより『ライダーズレコード』が２００２年から『ドラゴンライダーキック』をくりだすシーンから仮面ライダー龍騎を呼び出しネフィリムに攻撃する。
「グアアアアアアアン！」
「どぁあああああああ！」
「グオオオ!?」
突然のライダーキックにさすがのネフィリムもたじろいでしまう。だが、響の攻撃はここからである。
「次はこれ！」

〈ウィザード〉

そう言って響はウィザードのライダーレリーフを起動させ、２０１２年から『ストライクエンド』というライダーキックをくりだしている仮面ライダーウィザードを呼び出す。

「はぁぁぁぁぁぁ！はぁぁー！」

「グオオオオオオ!?」

が、これで攻撃は終わらない。響はウィザードの時を呼び出した後まで戻し停止させ、電王のライダーレリーフを起動しデンガッシャーソードモードを召喚しネフィリムを斬りつける。

「ハァッ！オラっ！セリャア！」

この攻撃により、ネフィリムはまたも後ろにたじろぐ。そこへ時間を再生したウィザードのストライクエンドが再び当たる。

「グオオオオオオオオオオ!!」

「あ、怒った」

「グオオオオアアアアアア!!」

幾度の攻撃にネフィリムは怒り咆哮しながら突っ込んできた。

「なら、俺も決めるか！」

響はそう言ってジオウライドウォッチ、グランドジオウライドウォッチの順に再度起動させる。

〈フィニッシュタイム！グランドジオウ！〉

そこから更にジクウドライバーを回し必殺技を発動させる。するとライダーズレコードが１９人の平成仮面ライダーをライダーレリーフから呼び出し歴史順にライダーキックをお見舞いしライダー１人のキックが当たる毎にそのライダーのライダークレストがネフィリムに表示される。

〈オールトゥエンティタイムブレーイク!!〉

最後にグランドジオウのライダーキックによりネフィリムは爆散する。それを影から見ていたマリアは頬を赤らめながら「キレイ…」と言っていた。

鼓動する心臓が残るが、そこへ響はサイキョーブレードで

〈覇王斬り！〉

を敢行、トドメをさしマリアの元へ駆け寄る。

「大丈夫だった？」

「え、ええ」

「とりあえず、外に出るよ」
「えぇ。そうｎ、って！ちょっ!?」
　響はそう言ってマリアをお姫様抱っこして外に出る。それはまるで、ヒロインを助け出したヒーロー（英雄）のような光景だった。
　マリアはあまりに突然のことだったことから火が出そうなぐらい顔を真っ赤にしていた。
「あっ！姉さん！」
　外では、マリアの妹である〈セレナ・カデンツァヴナ・イヴ〉やその仲間達が駆け寄ってくるのが見え響はマリアをおろした。
「あの、あなたは誰デスか？」
　Ｘの髪飾りをつけた金髪の少女〈暁切歌〉がそう聞いてくるのに対し響は
「俺？俺は『最高最善の魔王』！仮面ライダージオウだ！よろしく」
　と自己紹介する。それにセレナと切歌は苦笑い浮かべながら
「さ、最高最善の魔王ですか…」
「トンデモよりとんでもないのがここにいたデース！」
　と言う。が、黒い髪にツインテールの少女〈月読調〉は不服そうに睨んできた。
「なぜ、あなたは自分が『最高最善』と言い切れるの？そんなの偽善…！」

「し、調!?この人はマリアのこと助けてくれたんデスよ!?」
「そんなのわかってる！でも…！」
　そこに響がオーマジオウ口調で調に話しかける。（※小〇力也ボイス）
「ふむ、私が偽善者か…少女よ、確か調と言ったな？」
「え？は、はい…」
「調。私が行っていることは突き詰めていけばただの偽善だ。」
「え？」
　響の唐突の告白に調はもちろん皆が驚く
「それでも私が『最高最善』を唱えるのは、『みなの笑顔が見たい』という私の欲だ」
「みんなの、笑顔…」
「ああ、だから私は自分の欲望を満たしているに過ぎないのだよ。」
　そう言いながら調の頭を優しく撫でる。ちなみにマリアはそれ見て悔しがっている
「もし、これでも信用ないなら調が言う『偽善』の道に私が進もうとしたら止めてくれ。」
「え？……わかった！」
　調は快く引き受けた。（※少し頬を赤らめてたのはここだけの話）
「頼もしいな」
　そして、響は変身を解き、タイムマジーンを呼ぶ。（※口調も声も元に戻る）

「それじゃ、俺はもう行かないと」
「え？もう行ってしまうの？」
マリアの問いに響はうなずく。
「ああ、やることがあるからな」
そう言うと響はタイムマジーンに乗り込む。
「それじゃ！いつか、未来でぇぇぇ！」
そして、別れの挨拶をして時空の道『ジェネレーションズウェイ』に侵入した。目指す場所は現代である。
「ええ、いつか未来で会いましょうジオウさん」
マリアと調はそう言いながらジェネレーションズウェイが閉じた空を見上げていた。

響!初めてのライブ!魔王の怒り!!

どうも!　立花響だ!

今、俺はタイムマジーンに乗って『ジェネレーションズウェイ』を走ってる最中だ。なぜ、そんなことしてるのかって?それは前回の話を読んでくれ!さて、

「そろそろ着くな」

２０４２年現代　都心部

そこからジェネレーションズウェイを出た響は家に帰ろうとするが一つ問題を起こした。それは……

(ヤッベェエ!!間違えて真昼間の時間に出ちまった!!)

これである。結果、大勢の市民にタイムマジーンは写真を撮られネットには大量のタイムマジーンの画像がある。おまけに掲示板で『あれ(タイムマジーン)がなんなのか?』という議論が沸騰している。曰く「あれはＵＦＯだ」とか「あれは自衛隊が作った戦闘機だ」という風な感じに。

これはもう完璧にやらかした響である。

一方でそのやらかした張本人は

「やっちまったあああああああああああああああ!!」

自宅のベッドに顔を埋めながら叫んでいた。

（時間設定をミスった～！出発した時間から15分から30分の時間にするはずだったのを2時間から3時間にしちまった～。どうしよう」

考えすぎで途中から声に出てることにも気づいていない響である。そしてそのまま響は

「Zzz……Zzz……」

疲れ過ぎで寝ていた。

（※響視点）

それからは大体の時間を特訓に費やした。そう、シンフォギア　七不思議の一つ『飯食って映画見て寝る』をやってみた！（もちろん、カッシーン4体にミット持たして4

時間のパンチンググローブはめてのミット打ちなどや弦十郎さんのとこに行って特訓したりもしているけど）

（やり過ぎだ!せめて3時間にしとけ!ｂｙイヴェル）

はいはい!わかりましたよ!で、やってみた結果!『マジで効果あるんだけど!?どゆこと!?』状態に陥った。いや、だっておかしいだろ!なんでそれで鍛えられるんだ俺!?

……はっ!わかったぞ!きっと転生した時に体の体質が変わったんだ!（白目して現実逃避するな!ｂｙイヴェル）

あとは、ノイズが出た時はクロックアップ使って速攻で片付けて速攻で帰るを繰り返している。これは、ツヴァイウィングの2人と会わないようにするためだ。彼女達とはライブの時に会いたいからね。

閑話休題。

そして今日!待ちに待ったライブ当日!あぁあ、翼さんに会いたい!俺、翼さんのファンだから!（※このオリ主、前世でずっと風鳴翼の曲をずっと歌っていたのである）

うっさいよ、イヴェル。そして今、俺は会場の出入り口の列に並んでいる。入るのにチケットがいるからね!（※実際は知らん!ｂｙイヴェル）

閑話休題。

さて、会場には入ったから次はサイリウムだのなんだの買うかｎ
「響！来てたんだ！」
ん!?この井○裕香ボイスは
「おお、未来！」
「響、久しぶり！」
「おお！って俺はお前より年上なんだから、さんとかつけろよ……」
「えぇ～！いいじゃない！」
「はぁぁ、わかったよ。じゃ、兄ちゃんになんか奢らせてくれよ！」
「え？いいの？じゃあ、リンゴジュースでも奢って貰おうかな？」
「了解～！買ってきま～す」
さて、リンゴジュースね。しかし、また、原作改変か。今度は未来が来てるし……翼さんが絶唱詠ったりして……お！あった、売店
その頃、小日向未来はその場で響を待っていた。
「響、遅いなぁ…」
そんな事を言っていると
「おーい！未来ー！」
と響は叫びながらリンゴジュースとブラックを持って走って来た。

「はい、リンゴジュース」
「響、ありがとう!」
「どういたしまして!そんじゃ、ホール入るか」
　そう言って響と未来はホールに入って行った
（この後は原作と一緒なのでオリジナル展開まで飛ばします。ご了承ください）
「あ～あ、やっぱこの展開か!未来っ!先に脱出しておけ!」
「え!?響は!?」
「俺は少しやる事がある」
　そう言って響はノイズのいる方へ走って行き、未来も出口の方へ走って行った。

　一方でツヴァイウィングの2人は刀で斬り裂き、槍で貫きノイズを倒していくが余りにも数が多くてこずっていた
「ハァッ!」
　そう叫びながら翼は剣を振りかざす。
「数が多過ぎる…!」
　そこへ、叫び声が聞こえて来た。奏が後ろを振り向くと、1人の少女が崩壊した観客

席から転落していた。その少女は足から血を流し怪我をしており、そこに音を聞きつけてノイズが寄ってくる。
「あ…ああ…」
少女は腰が抜け動けないでいた。そこへ翼が間に入りノイズを斬り払い、
「走って！」
少女へそう叫び、戦闘に戻ろうとするが、そこへ大型ノイズが翼を吹き飛ばし壁に叩きつけ、翼は動かなくなる。
「翼ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
そこへ奏が駆け寄り翼の容体を確認し覚悟を決める。
「…全力で歌ってみるか…」
が、それを王響が許すはずもなく、
「ここでアンタが絶唱してどうすんだよ。俺がなんとかする」
奏の後ろからそんな声が聞こえ振り向くと響が翼の治療をしながら言い放つ。
「お前はここでコイツ翼守ってろ」
「何言ってんだ！お前こそ早く逃げろ！死にてぇのか！」
そう奏が反論するが、響は翼の治療を終えてノイズに向き直る。
「心配ない。私は王だぞ」

そう言いながらオーマジオウドライバーを出す。

〈ＢＧＭ：ジオウ　時の王者〉

「そのベルトは?」

奏がそんな事を言ってるが気にせず変身待機に入る。

響の後ろに巨大な時計が大地が割りながら現れ、マグマが時計の中に注ぎ込まれ〈ライダー〉の文字が出現する。

「…変身ッ!」

そして、オーマクリエイザーとオーマデストリューザーを押す。

祝福の時!!

最高!

最善!

最大!

最強王!

逢魔時王(オーマジオウ)!!

すると、黒のアンダースーツ『ノーブルアジャストストライクスーツ』に身を包み、『オーマラディアントアーマー』などの黒色と金色の装飾のようなアーマーを身に着ける。

最後にマグマで出来た〈ライダー〉の文字が縮小し空中に飛びオーマジオウの視覚機能を果たす『エクスプレッシブフレイムアイ』となる。そこで翼が目を覚まし、オーマジオウを見つめる。

「…ん？……えっ!?」

「なッ!?お前その姿は?」

２人が驚くのも無理はない。数日前に確認されたｕｎｋｎｏｗｎ（オーマジオウ）が目の前で正体を現したのだから。だがそんな事気にせずオーマジオウとなった響はノイズの方に顔を向けたまま仁王立ちしている。フルフェイスのマスクの為表情はわからないが赤黒いオーラからとてつもなく怒っている事だけは翼も奏もわかる。

「貴様らは私を本気で怒らせた…!!」

今、オーマジオウの戦（大虐殺）いが始まった。

右手をノイズの方へ向け大量の赤黒い蝙蝠を放ち、大半を片付ける。そして、必殺技を放つ。

〈エグゼイド之時!〉

ノイズ一体一体にキックを何発も打ちまくる。２０１７年の仮面ライダー『エグゼイド』の必殺技、

〈クリティカルストライク!!〉

を。だが、これで終わらず次の必殺技を放つ。

〈ドライブ之時!〉

すると会場の外から赤いスポーツカーが飛び込んできてノイズの周りをグルグル回りだす。

〈フルスロットル!!〉

そこへ響が飛び込み車をジャンプ台にし縦横無尽にノイズを蹴りまくり、最後の一体にキックを放ち車が止まる。

響はキックの勢いで足を擦りブレーキをかけスライディング状態で止まり立ち上がって周りを見渡す。

「……こんなものか…」

そこへ翼と奏が駆け寄ってくる。

「おいアンタ!」

「ん?なんだ?」

奏が呼びかけてくるので響は2人の方へ向き直る。

「…その…ありがとな!」

「礼を言われる事はしていない…では」

奏にそう返し響は去ろうとするが

「ちょっと待って！」
　翼に引き止められ響も何かと思い翼の方へ向く。
「…なんだ」
「御同行…願えませんか？」
「ふむ……ＯＫだ。だが、その前にやる事がある。どっかに隠れていろ」
「なんでだよ！」
「じゃあ聞くが、ツヴァイウィングがそんな物を着てノイズと戦っていると知られてもいいのか？」
「あ！わ、わかった！いくよ奏！」
「あ、ああ…」
　そう言って翼と奏はステージ裏に隠れる。
「それでよし。では！」
　そう言って『オーマジオウ』の力の一つである〈時間操作〉を行い、ノイズに灰に変えられた人達を再生する。
　その人達は死んだはずの自分が生きてる事が信じられないといった様子で驚いていた。（※信じられなくて当たり前。死んでたんだから）
「ふぅー…完了」

そう言って響はステージ裏に向かう。手にはスマホでメールを送っていた。

〈3，4時間前　成田国際空港〉

そこでは銀髪の少女〈雪音クリス〉が数人の黒服のエージェントの護衛と歩いていた。

「後もう少しだからな」

エージェントの1人がそう言って空港を出た直後、奴等は現れた。その手にはアサルトライフルが握られており見るからに傭兵みたい人間達がエージェント達に向け発砲する。一斉射撃の弾幕はどんな人であれ避けられない程の数である。エージェント達とクリスはもう終わりだと思い目を瞑るがいつまで経っても自分達が死んでおらず何かと思い1人のエージェントが目を開けるとカッシーン10体がクリスとエージェント達を守るように囲んでいる。

「なぜ銃が効かん!?」

傭兵の1人がそんな事を言っているが知った事かと言わんばかりにカッシーンが3，4体突撃し手に持つ槍で無双して行った。

その後、他の二課職員などが到着する。その時カッシーン達はクリス達の警護をしており、『到着した職員に間違えられかける』というエピソードがあるが割愛させていただ

く。

閑話休題。

そのまま二課職員達がカッシーンに礼を言いに行った。

「君達！本当にありがとう！君達のおかげで我々は死なずにすんだ」

そう言われるカッシーン達だがその中の1体が

「気にするな。我が魔王の命令を行ったに過ぎん」

と言ってカッシーン達は空を飛び帰っていった。

「魔王…？」

だが、この後その魔王が二課に来るなどとはこの時ここにいた人達は知らなかった。

いざ二課へ!奏の心機一転!

どうも!立花響だ!……俺、そろそろ挨拶変えようかな?
さて、俺が前回やった事により犠牲者がゼロを達成!みたか○○○○!やってやったぜ!
(この言葉がのちに嘘になる)
……G編とかでタイムパラドックス起こりませんように。
で、ステージ裏にいざ向かうと奏さんに質問攻めにあった。
「お前何したんだ!?」
何したんだと言われても
「死んだ民を生き返らせただけだが?」
「どうやってんだよ!?てかそもそもなんでできんだよ!?」
「私は時の王者だ。時間を操るなど容易い事よ」
「……ダメだ。アタシの頭がパンクする」
そんな難しい事言った覚えないんだけど……
「……とりあえず外に出るか」

「ああ、そうだな」

その後、響達が会場の外に出ると二課職員が後処理している場所に行くが響はまだオーマジオウになっていた為、間違えられ銃を向けられた。がたかだか銃弾如きではオーマジオウの鎧に傷一つつける事も出来ないので特に気にせず響は奏達と話していた。

「お前勇気あんな……銃に囲まれてるのに平然としてるなんて」

「たかだか弾如きで私の鎧は傷付かん。この鎧ならおそらく核にも耐えられると思うがまだ調べていないな」

そんな事を話ながら響は口の部分だけアーマーを外しコーヒーを飲んでいた。そんな事出来るのかって?そんなのご都合主義でどうにかするだけである。

「では二課に御同行してもらいます」

そん言葉が聞こえ気がつけば響の両手に手錠がついていた。

オーマジオウが手錠……なかなかシュールな絵だ。

そんなこんなで響達は二課に着き、司令部の扉前にいる。

「この先か……」

響はそう言って扉が開くと無数のクラッカーの音と
「「ようこそ!特異災害対策機動部二課へ!!」」
と歓迎の言葉を送られ天井には『熱烈歓迎!!』の文字がある。
響はこれに
（やっぱこういう事やるんだなぁ）
と物思いにふけっていた。

歓迎会と言うべき物を行い、響はいつの間にか手錠が外され、またも口の部分だけアーマーを外し食事していた。声は小山○也のままで。
「アンタよくそんな器用な事出来るな」
奏の質問の意図がわからず響は逆に質問する。
「……何がだ?」
「口の部分だけ外して飯食うなんて器用だって言ってんだ」
「まぁな」
すると奏はニヤニヤして響を眺める。
「……何だ?」

「いやさぁ、顔見せたくないのかなぁと思って」
「こちらにも事情というものがある」
そう言ってるとシルクハットをかぶった弦十郎が話し始めた。
「改めて自己紹介と行こう！俺は風鳴弦十郎。ここの責任者をしている」
「私はデキる女と評判の櫻井了子よ。よろしくね！」
「私は風鳴翼です。よろしくお願いします」
主要人物の自己紹介が終わる弦十郎は響に「名前を教えてくれないか？」と尋ねる。
「私の名か……」
すると響はどこから取り出したのかデカデカと金色で『平成』と書かれた板を持ち名乗り始める。
「私の名はオーマジオウ！かつて『平成』の時代を駆け抜けた仮面ライダー達の力を継承し時を統べる王である」
その名乗りに大半が微妙な表情をしているがが名乗りはこれで終わらず
「本名……」
響は変身を解き姿を晒す。尚、奏は一回顔を見ているので思い入れなどはない。
「立花響だ！よろしく！」
その後、響はシンフォギアの能力などを教えてもらう。

え?シンフォギアの能力を説明しないのかって?公式を見ろ!

「丸投げしてんじゃねぇ!」

響に殴られたんで一応説明します……

シンフォギアの能力とは!

その1!歌を歌うことによりアーマーを維持＋強化する!

その2!歌を歌うことによりノイズを実体化!攻撃が通るようにする!

その3!シンフォギアのアーマーにより炭化しなくなる!

また、シンフォギア・システムには３０１，６５５，７２２種類のロックが掛かっておりバトルスタイルなどに応じて系統的、段階的に解除又は限定解除される。早い話がゲームでレベル（バトルスタイル）を上げることによりスキル（ロック）が解除されるような感覚である。また、限定解除の〈エクスドライブ〉は早い話がポケ〇ンのメガシ〇カのようなものだ。

シンフォギア・システムおよび櫻井理論の説明が終わり了子さんが何か質問はあるかと聞いてくるが『ビルド』の能力『天才物理学者』により全て理解している為特になかった。尚、響が櫻井理論を一回聞いただけで理解しているので二課職員は「この人スゴッ!」的な感じで感心されている。

「では次は響くんだ。君の力を教えてくれないか?」

弦十郎に言われ響はどうしようか悩むも不承不承ながら了承し、説明を話し出す

「まず、オーマジオウ単体の能力は……」
二課に教えたオーマジオウ単体の能力！
その1！時空を操る事ができる。
その2！どんな強大な敵でもその敵を上回るようにパワー調整ができる。
その3！半径４Ｋｍの敵を感知し異次元に送る事ができる。
その4！因果律を操り物を操る事ができる。
その5！どんなダメージも０にする。
「めちゃくちゃだな……」
奏の言葉に響は苦笑いして頷くしか無くなってくる。
「単体の能力とはどういう意味だ？」
「ジオウは本来『平成の仮面ライダー』１９人の力を受け継いで戦うんだ。更にジオウは時間を操る事ができる。つまり過去から先輩のライダーを呼び出す事ができるってわけ」
弦十郎の問いに響はそう答える。
（実際４年前やったし……グランドジオウで……）
〈４年前〉
〈グ・ラ・ン・ド！ジオウ！〉（※第二話参照）

〈現代〉

「ついでに言うと仮面ライダーの歴史を１９も見せるの大変だからこれでみてくれ」

そう言うと響は何処からか大きな袋をを取り出し弦十郎に渡す。

「その中に平成ライダー２０作品と映画のＤＶＤが入ってるから興味あったら観てくれ」

「わかった」

そう言うと弦十郎は一区切りするかの様に息を吸う。

「では響くん！君に協力を要請したい！」

響はそう言われるのを待っていた。響の覚悟は既に決まっている。

「あぁ！よろしく頼む！」

響は笑顔で弦十郎と握手した。

その後、歓迎会は終わり響は家に帰った。ちなみに緒川さんがこの後仕事だった為翼は響に『ライドストライカー』で送り届けられた。

それから数日間の間に起こった事を説明する。ライブ会場の死人復活劇だが一つイヴェルすら後から気付いた問題があった。その問題は前回の時響は死亡者を復活する時に間違えてノイズに灰に変えられた人と設定してしまい二次災害による死亡者を完

全に忘れていたのである。これは次回でなんとかしようと思うのでよろしくお願いします。

それから数日後・・・・

「私と手合わせお願いします!!」

響は体を動かそうと訓練室へやって来ると翼が手合わせしてほしいと頼み込み響は二つ返事で了承し訓練室の中央付近に行き翼はシンフォギア『天羽々斬』の起動する鍵である聖詠を詠う

〈Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ〉

対し響はジオウライドウォッチの『ライドオンスターター』を押し起動する。

〈ジオウ!〉

それをジクウドライバーの『Ｄ，９スロット』に填め『ライドオンリューザー』を押す。すると響の背後に不透明の時計のホログラムが現れ時計の針が回る。

「変身ッ!」

響は変身ポーズをとりながらそう言うと左上に上げていた右手を一気にベルトの右下におろしジクウドライバーが３６０度回る。すると背後の時計は１０時１０分をさして止まり時計に『ライダー』の文字が浮かぶ。

〈ライダータイム!　仮面ライダージオウ!!〉

そして響はジオウのアンダースーツ『アジャストライクスーツ』に身を包みその上にアーマー『オーバルライドテクター』を装着し、最後に背後の時計のライダーの文字が飛び出し収縮しながら
顔アーマー『キャリバーA』に装着されジオウの視覚機能『インジケーションアイ』となり変身が完了する。
ジクウドライバーのメーンディスプレイ『ザイトウィンドー』には『ZI—O　2018』と書かれている。
「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ時空を超え、過去と未来を知ろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオウ!今ここに降臨した瞬間である!」
「奏?何やってんだ?」
「す、すまん旦那。なんか急に言いたくなって……」
そこへモニタールームから見ていた奏と弦十郎の横やりが入る。
「今回は奏なんだ……」
翼さん。メタ発言やめてください!
BGM：JUST　LIVE　MORE
そして2人の試合が始まる。
「それでは、行きます!響さん!」

「来い！翼！」

〈ジカンギレード！ケン！〉

そう言い合って２人は一気に駆け出し鍔競り合いとなる。今回は翼に軍配が上がり響のジカンギレードを上に飛ばし胴体を斬り上げ退ける。

「イッテテ……刀には刀だ！」

〈鎧武！〉

響はそう言うと腕の『ライドウォッチホルダー』から『鎧武ライドウォッチ』を外してライドオンスターターを押して起動しジクウドライバーの『Ｄ，３スロット』にセット、ライドオンリューザーを押し３６０度回す。

すると響の頭上に鎧武の頭部が現れ響の頭に装着し展開され『鎧武アーマー』となる。

〈アーマータイム！ソイヤッ！鎧武！〉

そして何処からか現れたガイムの文字が『鎧武ヘッドギアＭ』の視覚機能『リバーサルインジケーションアイ』となりザイトウィンドーには『ＧＡＩＭ　２０１３』と書かれていた。

「え!?アーマーを重ね掛け!?」

響がやった事に対して翼は驚愕していた。アーマーの上にアーマーを重ね掛けするというジオウを知らない人には「なんじゃそれ!?」と言われることをやっているので仕

方ないのだが……
「あっ!花道でオンパレ～ドだ～!」
　対し響は両手に『大橙丸Ｚ』を持ち決めポーズをしてから、駆け出し翼を斬りつける。が翼はやられているだけではないと言わんばかりにエネルギー状の刃を飛ばしてきた。
〈蒼ノ一閃〉
　響はそれをイナバウアーで回避し周りを見渡すが翼は何処にも居らず、上から雄叫びが聞こえ見上げると超巨大な剣を足に装着しライダーキックしてくる翼がいた。
〈天ノ逆鱗〉
　響もこれには驚愕で
「シンフォギアってライダーキックできるの!?」
　と叫びながらジオウライドウォッチ、鎧武ライドウォッチ、ライドオンリューザーの順に押し３６０度回す。
〈フィニッシュタイム!鎧武!スカッシュタイムブレーイク!!〉
「輪切りにしてやるぜ!」
「いや、輪切りにしちゃダメだろ!?」
　響の言葉にツッコミを飛ばす奏達だが響は気にせず大橙丸Ｚを構える。
「ハアアアアアアアアア!!」

「セィヤアアアアアアア!!」
そして2人の刀がぶつかり衝撃を放ち周りは嵐のように荒れ土埃が舞い訓練室はボロボロとなった。土埃が収まるとそこには倒れ伏した翼と響がいた。
その後目を覚ました2人は弦十郎にもの凄く怒られしばらくは訓練は禁止となった。ちなみにボロボロとなった訓練室は響が時を戻し直したので余計な経費を出さずに済んだと弦十郎は安堵していた。
それから更に数日後、響達三人はノイズが発生し現場へ急行。すぐに終わったがその際、奏の動きがぎこちなく響には全力じゃない気がしており、聞こうか聞かないか悩んだ結果聞く事にし奏の元へ向かった。案外すぐに見つかり響は奏に質問する。
「奏さん。この前のノイズ戦、動きがぎこちなかったんだが?」
その質問に奏は「ふっ」と笑いながらこう答えてきた。
曰く、あのライブの後からシンフォギアを纏った際に身体が段々と重くなっていくらしいのだ。
「アタシももうだめなのかな……」
奏のそのネガティブな発言に響は何かないかと考えた結果ある事を思いつく。
「なぁ、戦う方法、あるにはあるぞ」
その言葉に奏は反応した。それはまるで絶望の中一つの光を見つけたような顔だっ

た。

「なんだよ……その方法って」

「……身体の改造」

響は奏にその言った。オーマジオウの力には森羅万象を司る能力もあるため簡単なのだ。今回は仮面ライダー『フォーゼ』『ウィザード』『ドライブ』『エグゼイド』の４つの力を使う事になる。

奏はそれを二つ返事で「頼む！」と頼んでくるのだが二つ問題がある。一つはこの組織二課のトップである風鳴弦十郎が許してくれるかと言う事だ。なので取り敢えず響は弦十郎の元へ行き説明をしどうかと聞いたら「むしろ頼む」と言われＯＫが出た。次に二つ目の問題だが、まず、天羽奏の身体には『ＬＩＮＫＥＲ』という薬をシンフォギアを纏う為にヤク漬けされておりその際に薬を身体に入れ過ぎれば過剰摂取（オーバードーズ）を起こし吐血し倒れ、逆に数日間入れなければ鼻血などの貧血系となり倒れてしまう。ハッキリ言ってそんな状態の身体から改造するのは最悪なので奏の身体からからＬＩＮＫＥＲを完全に除去しなければいけないのだが、現代の医療技術では完全に除去する事は出来ず微量は残ってしまう。そこで響はある事を思い付く。それはＬＩＮＫＥＲをブランクライドウォッチに入れる事だ。ブランクライドウォッチは能力が入っていない言わば空のペットボトルのような物でそれをブランク（固有能力無し）の状態からライダーライドウォッチ

にするには『力を受け継ぐ』あるいは『心を繋ぐ』などなどだがそこはイヴェルも分かってないので省略させて頂く。

で、そんな訳でＬＩＮＫＥＲを抜く事になった。

「んじゃ、いっちょやりますか……」

響は奏の身体にブランクライドウォッチを押し付けＬＩＮＫＥＲを抜いていく。抜き終わったら次はそれぞれのライドウォッチを起動させ改造していった……。

結果、奏の身体は改造に成功した。シンフォギア　を纏ってもピンピンしておりＬＩＮＫＥＲ無しで適合係数が上がっているので一種の奇跡である。

「オレは奇跡の殺戮者だぁぁ！」

なんか聞こえたがここは無視で行こう。さてそんなこんなでやった改造でブランクライドウォッチが変化したのだが……

「なんでだあああああああああああああああああああ!?」

本来ならＬＩＮＫＥＲライドウォッチとかになるであろうと思っていた物が違った。ライドウォッチのライダークレストが描かれる場所にはガングニールのアウフヴァッヘン波形が描かれており、

年数は『２０４２』と書かれている。ライドウォッチの『ウェイクベゼル』を回しライドウォッチの能力の元の持ち主が描かれる『レジェンダリーフェイス』には

「なんで奏さんが描かれてるんだよ～」

そう奏の顔が描かれていた。その名も『カナデライドウォッチ』である。ライドオンスターターを押すと『カナデ』と音声が流れるので間違いない。

二課にこれを持っていったら全員に「なんで!?」と驚かれた。尚、検証で奏はガングニールを纏えたので大丈夫だろうという結論に達した。

響はなんでこのライドウォッチが生まれたのか分からずカナデライドウォッチを眺めていた。

魔王。テレビ局に突撃!!

どうも!立花響だ!

前回、まさかのカナデライドウォッチが誕生するというわけわからん事が起こったのでこのウォッチをテストしようと思うのだが一つ問題がありまして……

前に翼さんとやり過ぎたから訓練室は使用禁止になりどうしようかなぁと思っております。はい。

「なぁ!なにやってんだよ?」

「おお、これは良い所に奏さん。実はですね……」

「お前なぁ……山とかに行って試せよ」

「・・・奏さん。アンタ天才だ!」

俺はそう言ってライドストライカーで山に行った。いやぁ、しかし山は思い付かなかったな。

現在、響はライドストライカーで山に来てから人気がないか確認してからジオウとなっていた。
「よし!やるか!」
響はそう言ってカナデライドウォッチのライドオンスターターを押す。
〈カナデ〉
起動したウォッチをD，3スロットにセットしライドオンリューザーを押し回す。
〈アーマータイム!　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ　カナデ!〉
その音声と共に響のジオウのアーマーにカナデアーマーが重ね掛けされる。全体的にオレンジ色となり腕と頭にはガングニールのギアが装着され肩からは槍のアームドギアが斜めに突き出るような感じに装置される。カナデヘッドギアの視覚部分には『カナデ』の文字がインジケーションアイに付く。
「こんな感じか。武器は……無いな。ジカンギレードで戦うのかな?ん～作ろっかな」
一通り響は見た目だのなんだのを確認して必殺技を撃てるかやってみる。
〈フィニッシュタイム!　カナデ!　スターダスト∞タイムブレーイク!〉
響は思い切り飛び上がり右足に突如現れた槍を装着しライダーキックをする。
「このアーマーの必殺技はこれか……。確認も終わったし帰るか」

響はそう言ってライドストライカーを取り出し自宅に帰宅する。
その道中の事だった。
響はバイクで自宅に帰っている途中の公園でイジメの現場を目撃した。
「アイツら、なにやってん……ッ!?」
響は戦慄した。やはりと言うべきかライブの惨劇の生存者を虐待している人間は必ずいる。今回は二次災害の犠牲者しかいない為余計にそうだろう。それはライブにいた未来も同じで……。
「誰か助けて!」
「誰が助け求めていいっ言ったよ?あぁ!?」
そう言って一人の男が蹴りを入れ男女合計五人のリンチが再開される。一人の女の子がイジメられて響は怒り止めに入った。
「おい!テメェらなにしてやがる!」
「え?なにって……正義の執行だけど?」
それに一人の女子が振り返ってそう言ってきた。恍惚感に浸るような醜い笑顔で。
「一人の女の子をリンチする事が正義だと…!!」
そこへもう一人男子が振り返ってきた。
「だってコイツ人殺しだから、警察も動かないから俺らがやってんだよ」

それを聞いた響は拳を握る。その手は爪が食い込み物凄い量の血を流していた。
「ふ…けん…よ」
「え？」
「ふざけるなよ…下郎が…！」
響はいよいよ本気で怒り出した。大切な人を「人殺し」と言われたのだ。昔からずっと一緒にいた妹分を、幼馴染を、心友を人殺しと呼ばれた。響の額には血管が浮き出て背後には金色と赤黒い色が混じったようなオーラがものすごい勢いで噴出されていた。
「貴様らがやっている事は正義では無い…！ただの自己満足だ！」
「「「「ヒッ!?」」」」
「そんなもので私の大切な友を傷つけるなど…万死に値する！」
ここで一つだけ幸いな事は既に未来が気絶していた事である。
そのおかげで響は自身の最大（オーマジオウ）を使う事ができるのだから。
響の姿が変わったのを見て五人は腰が抜けたのか倒れる。
「貴様らには一度、地獄を見て貰う…」
〈ダークライダーズ！〉
「人をやるのはよくて自身は嫌だなどという事が許されると思うか？」
そう言って響は未来をお姫様抱っこで抱きかかえその場を離れた。

「い、嫌だあああああああ!!」
「た、助け…て!」
「いや…いや…」
「死にたく…ない!死にたくないよぉ!」
などのダークライダー達によりリンチされる彼らの阿鼻叫喚を退場曲にして。

響はウィザードのテレポートを使い未来の部屋で未来を手当てしベッドに寝かす。
「すまねぇな。俺のミスで。すぐに解決してくるからな」
そう言って響はテレポートを使う。行き先ははみんながどんな情報もすぐにわかる場所。

P・M・5:30
響はオーマジオウの姿でテレビ局に来ていた。というよりも突撃していった。警備員に発砲されようが警棒で叩かれようがオーマジオウのアーマーというべきかダメージが全く入っていない。それどころか『魔王の覇気』的なもので警備員は気絶していく。
そして響は生放送番組に割り込んだ。その番組の内容がタイミングよくライブの惨

劇の事だった。
「貴様らか!余計な風評を市民に教え込んだ下郎共は!!」
「な、なんだ君は!」
　男性が何か言っているが頭に来た響はそんな事では止まらない。
「貴様らはあのライブの惨劇の現場を目にしたのか!?していないだろう!それなのに言いたい放題言えるとは愚かを超えて生存者に対する無礼である!今!これをを見ている人々もだ!ライブ会場にいなかった人間のほとんどがこれを見ているのだろう。そんな貴様らには良いものを見せてやる!」
　そう言って響はホログラムを映し出す。そこにはダークライダーズによってボコボコのボロボロになり傷だらけの未来をリンチしていた五人が映っていた。
「いいか!これは貴様らに対する警告だ!生存者に差別、虐待などをした場合、私が其奴を探し出しこの世から存在を消してやろう!貴様らもな!」
　響はそう言って後ろのニュースキャスター達を因果律を操作し浮かせ壁に叩きつける。
「お、お前は何者だ!」
　ディレクターらしき人物がそう問いかけてくるのに対し響は宣言した。
「私の名は、オーマジオウ!私が最低最悪の魔王だ!」

そう言って響はスタジオを出て行った。その背中はとてつもない悲しみで溢れていた。

その後、響は弦十郎にものすごい叱られた。しかし響には反省はすれど後悔は微塵も無かった。あれで一人でも助かってくれる人がいるなら響は例えオーマジオウが人々に「最低最悪の魔王」と呼ばれてもよかった。結果的に生存者へのバッシングは弱まりなりを潜めたがオーマジオウの事で論争が起こっている。

曰く、オーマジオウは生存者へのバッシングを減らす為に自分に注目を集めた。

曰く、オーマジオウは平気で人を殺す悪魔だ。

などと様々な事が飛び交っており世間もオーマジオウの話題で持ちきりだった。二課もこれはさすがにお手上げ状態となった。

一方で、響は二課で暮らす事にし家を出た。家族や未来は悲しむだろうがあの周辺には響がオーマジオウだと知っている人間がいる。そしてもしそれが知られた場合、響の大切な人達が傷ついてしまうと考えた。だから響は家を出る決意をした。家族が気付いた頃には響の部屋には生活していた痕すらなかった。そして、それから立花家周辺で立花響を見た者はいなかった。

クリスと原作開始と教師

ちーっす！立花響デスッ！「真似すんなデスッ!!」

なんか二話の時以来の声が聞こえた気がするけどきっと気のせいだな！（無かった事にした!?）

まぁ、そんなこんなで前回書いた通り俺は一人暮らしとなった訳ですが、何故か翼さんも引っ越してきたわけでして

「なんで？」

と聞いた所「リディアンへ行くには遠いから」とのことなのだが、なんか裏がある気がするんだよな。ま、どうでもいいけど。あとクリスちゃんにも会った。その時ね、俺の事を「親の敵だ」バリに睨んできたんだよ。最終的には

「よろしく！クリス！」

「はい！響さん！」

的な感じで仲良くなった。で、その一年後俺は１８になりおやっさんに

「俺が教師!?」

「あぁ、響くんは頭いいだろ？少なくても東大首席レベルで」

まぁ確かに仮面ライダーの能力使えば歴史は『ジオウ』、数学と理科と技術科目は『ビルド』、美術や家庭科は『カブト』とかで・・・アレ？俺、意外に教師できる？っていうか。

「そもそもなんで俺が教師やんの？」

「君が二課で働くには早いからな。だったらリディアンの教師でもやってもらおうかと」

あっそう、って女子校!?まぁ頑張りますが・・・

そんなこんなで響は教師免許を取得しリディアンの教師となった。１８歳という若さで。

とこんな感じで充実した2年間であった。尚、現在の響の歳は１９歳となった。

リディアン音楽院高等科1年教室

「遅れてすまん！」

教室に一人の男性が入ってくる。

「遅いよ！常盤先生！」

「いやぁ、猫が木に登って降りられなくなったみたいでな。なんか可哀想だったから降ろしてたんだ」
「先生ええ！優しいにも限度があるよ！」
　そう言われて響は苦笑いを浮かべた。
「では、授業を始めます」

「どうなんですか？もう1年は教師やってるけど。常盤せ～んせ！」
「茶化すな。クリス！」
　さて、みんなお気付きだと思いますが「常盤」とはリディアンでの響の偽名です。偽名は「常盤逢牙（ときわおうが）」。何故、偽名にするのかというともしも響の実家の近くからきた生徒がいた場合「立花先生」などと言われたら終わるので偽名になっています。一応、念には念を置いてという訳です。
　なぜ、終わるのかって？それは前回を見てくれ！
　だが、そう都合良く物事が進むわけがなく。
「・・・響？」
　響は自分を呼びかける声が聞こえ「ギクッ!!」となりそうなほど背筋を伸ばす。後ろ

をそっと向くとあ～ら不思議小日向未来がいる。
（わ、忘れてた～!!そういえば未来はリディアンに入学すんだった！）
それを見ていたクリスはため息をして助け舟を出す。
「違うよ！この人は常盤逢牙先生だよ！」
「あ、そうなんですか。すみませんでした」
そう言って未来はその場を去った。
「これでいいの？」
「すまん。クリス、ありがとう」
「それじゃ、私も授業あるから」
そう言ってクリスも去っていった。
「俺も行くか」
響は立ち上がり5時限目の授業のクラスに向かった。

どうも、小日向未来です。って私は誰に言ってるんだろう？
閑話休題です。
私は2年前に大切な人を失いました。

2年前に私は1人でツヴァイウィングのライブに行き心友の「立花響」に会い一緒にライブを見ていたけど、どこからかノイズが現れて私達はなんとか会場の外に出れた。でも響は「やる事がある」と言って戻って後からきたメールには「やる事が終わった。また、会おう」と書かれてあって私は安心した。けど、本当の悪夢はそのあとからだった。生存者に対する虐待などが起きて私もその対象になった。ある日、私は集団でいじめられた時に金色の人が助けに来てくれて気がついた時には自分の部屋のベッドに手当てされて寝ていた。下に降りてテレビをつけると私を助けてくれた人がいた。その人は自分のことを「最低最悪の魔王、オーマジオウ」って名乗っていたけれど私にはそうは思えない。そしてジオウさんがスタジオから出て行く時の背中はとても悲しそうだった。そして、その数日後に響はいなくなった。響の両親が言うには人知れず気づかれないうちに出ていったらしい。スマホも置いていったらしく連絡も取れなかった。

そして私はリディアン音楽院という女子校に入った。ここはツヴァイウィングの奏さんが通ってた高校で翼さんも現在通っている。そして私はそこである人を見た。2年前にいなくなった響がいました。でもその人は名前の違う別人だったみたい。でも私はやっぱりあの人は響だと思っている。

それから数時間後、
ヴヴ――ヴヴ――
二課にサイレンが鳴り響く。
「ノイズですッ！」
報告を聞いた風鳴弦十郎は指示を飛ばしその指示を聞いた3人はバイクで現場まで急行しようとする。しかし、新たな高エネルギー反応を探知した。
「新たな高エネルギー反応を確認！」
「解析に回して！　ッ!?これは…！」
了子が驚愕するのも無理はない。それは新たなシンフォギア　の反応だった。モニターには《ＳＨＥＮＳＨＯＵＪＩＮＧ》と書かれている。
「神獣鏡（シェンショウジン）…だとぉ…!?」
その2時間前、
未来は「特典、ＣＤ」と連呼しながら走っていた。今日はツヴァイウィングのＣＤ発売日だからである。
「もうちょっと！……ッ!?」
だが、「そう上手くいかないのがこの世である」と言わんばかりに灰が飛んでいた。この世界で灰があるという事は則ち、

「ノイズッ!?」
　すると何処からか悲鳴が聞こえ未来は聞こえた場所まで走った。流石は元陸上部と言うべきか1、2キロはあったのに息切れを起こしておらずノイズを掻い潜り、襲われていた少女を抱きかかえ壁を蹴ってノイズを避け逃げ出す。その先には工場があった。
　未来は少女を先に行かせてから自分も梯子で屋上へ向かう。逃げ切れたと安心するのも束の間、すぐにノイズが囲み八方塞がりとなる。
「お姉ちゃん、こわいよぉ……!」
　少女は今にも泣きそうだった。未来はそんな少女に、昔言われた事を言う。
「大丈夫! 私の心友が言ってた。「自分が望みさえすれば、運命は絶えずに自分に味方する」って。だから、生きる事を諦めないッ!」
　そう言うと未来の首に掛かっていた赤いペンダントが光だし未来は胸の歌を歌う。
「Ｒｅｉ　ｓｈｅｎ　ｓｈｏｕ　ｊｉｎｇ　ｒｅｉ　ｚｉｚｚｌ」
　そして、辺り一面が光り出した。

未来、二課へ

「これどうなってるのぉぉぉぉぉおおおおおおおおお!?」
どうも! 小日向未来です! 前回の時になんか歌が浮かんで口ずさんだら何故か知りませんが
大変身していたんですが!?
「お姉ちゃん! カッコいい!」
「うん、ありがと!」
じゃ、なくてぇぇぇぇえ! 私はまだこの状況を把握してないの!! っていうかこの格好、露出度高過ぎない?
ん? ノイズが集まり始めたんだけどこれって
「どういう事?」
「お姉ちゃん、こうなったら一つしかないよ?」
え、何が!?
「合体だよ!」
「ニチ○サスーパーヒー○ータイムじゃないんだよ! これは!!」

もう、涙出てきたんだけど。取り敢えず逃げなきゃ！私はそう思って女の子を抱きかかえて思い切りジャンプする。けど
「これは飛びすぎ!?」
そのまま壁に激突する。と思ったら誰かに抱き抱えられてた。

「流石に飛びすぎだろ」
未来は響が変身するジオウに抱き抱えられていた。
「え!?だ、誰!?」
「大丈夫そうだな。俺は仕事してくるから動くなよ！」
そう言って響はノイズへ向かって行った。

「よーしッ！一仕事と行きますか！」
響は気合を入れると後から来た翼達もシンフォギアを纏いノイズとの交戦に入る。
響も何度かノイズを斬り伏せるとライドウォッチホルダーからウォッチを取り出す。
「これを使ってみるか！」
〈ツバサ〉

そして、『ツバサライドウォッチ』をD，3スロットにセットしドライバーを回す。
〈アーマータイム！ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ　ツバサ！〉
すると全体的に青と白のカラーに足と肩には刀のようなブレードが付く。手には『ハバキリソード』を持つジオウがいた。
「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時を超え過去と未来を知ろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウツバサアーマー。新たな力を手に入れた瞬間である！」
「翼？どうした？」
「すまん。なぜか言いたくなってしまった」
「なんでですか……」
などの茶番が入るが、響はそんな事気にせずノイズに斬りかかる。何体かを斬り倒し最後に必殺技をくり出す。
〈フィニッシュタイム！　ツバサ！　天ノタイムブレーイク！〉
手に持つハバキリソードを巨大化させ、それの柄部分に飛び乗りライダーキックをする。ハッキリ言っちゃえば天ノ逆鱗のパクリである。
「セイヤアアアアアアアアアアア!!」
それをノイズの群れに叩きつけ戦いは終わった。

その後、いつも通り一課が二課と協力して後始末をしている。仮拠点では未来なども休憩している。
「あったかいものどうぞ」
「あ、どうもありがとうございます…」
未来は友里にあったかい飲み物をもらいふやけ顔になった。その瞬間、シンフォギアが解け未来は後ろによろけるが響が受け止めた。
「あ、ありがとうございます！」
「いや、別に」
「私、ジオウさんに助けられたのこれで2回目なんです！」
そう言って未来はVサインをするが響には思い当たる事がなく首を傾げていた。すると未来が守っていた少女の母親が迎えに来て少女は笑顔になり帰って行った。
「それじゃ、私も…」
と言って未来も帰ろうとするがそうは問屋が卸さない。大勢の黒服のが未来の通り道を塞ぎその中心には奏と翼がいる。
「このまま帰らせるわけにはいかねぇな！」
「我々、二課に同行願います」
そう言って未来に手錠をかけ車に乗らせ二課に連行された。

「なんでぇぇぇぇぇぇえええええええええええええええええ!?」
と虚しく未来の叫び声が空に響きながら。
尚、置いてきぼりを食らった響とクリスは
「翼のＳＡＫＩＭＯＲＩ語……治せなかったな」
「うんうん」
と言って響はクリスを抱いて二課にテレポートした。
その一方で未来達は
「ここは…リディアン?」
未来が驚くのも無理はない。自分が通っている学校に連れてこられたのだから。
「ここの地下に本部があるんだ」
奏はそう言うと職員室などがある中央棟に向かって歩き出しそれに未来がついて行く。少し歩くと職員用のエレベーターに辿り着きそれに乗った。その中ある装置に緒川が携帯端末をかざすと手すりが現れ階層の番号が書かれている場所は階層の数が増えている。
「しっかり捕まってください」
緒川が未来にそう言うので未来はなぜかと訊こうとするがその前にエレベーターが動き出した。タワーオ◯テラー並の速度で。これにはたまらず未来は思い切り悲鳴を

上げていた。小さい子にはトラウマレベルの速度なので仕方ないのだが…
「大丈夫か？」
奏が未来を心配するが未来のＳＡＮ値は既にほぼ削れている。その証拠に未来は白目になってげっそりしていた。
「あ、はは…大丈夫です」
「顔が恐ろしい事になってますよ…」
流石の緒川もこれにはツッコミを入れ司令部の前まで行く。
「さぁ、ここだ！」
そう言って奏は司令部の扉を開けると
「「ようこそ！特異災害対策機動部二課へ」」
と歓迎の言葉とクラッカーの音が鳴り響く。天井には『熱烈歓迎！小日向未来さま！』と書かれた横断幕が付けられている。これに未来はポカーンと口を開けており緒川さんは苦笑いして翼は眉間に手を当てていた。奏は堪え切れずに大爆笑している。
（どっかで見たな。このシーン）
と響が思っていると、未来に了子がスマホをカメラモードにして近づく。それを響が力ずくで止めた。
「もう、なにすんのよ！」

「手錠した女の子に写真はおかしいだろ！悲しい思い出作らせる気か!?」
　などと口論をする。
「では、自己紹介といこう！俺は風鳴弦十郎。ここの責任者をしている。
「そして私がデキル女「(笑)」誰が（笑）よ！」
　了子が自己紹介している所に響が茶々を入れる。
「アンタだよ」
「なんだとおおおお！「いいから早く自己紹介しろよ」アンタが始めたんでしょ!?」
　そう言って了子は咳払いをして自分の紹介を終え他の主要メンバーも自己紹介を終えた。
「さて、君に訊きたい事があるんだが」
「はい、なんですか?」
「そのペンダントをどこで手に入れた?」
　未来はその質問にこう答えた。なんでも昔に1人の心友がいなくなり1人でふらふらと歩いていた時に拾って持っていたとの事。
　そんな大事な物が落ちてる時点でヤベーイ事なんだが…
「そういえばあの姿ってなんですか?」
「あ、ヤッベ」

「うん！それに答えるためにも二つ程お願い聞いてもらえる？」
未来の質問に了子が笑（暗黒微笑）みを浮かべて近づいてくる。未来は恐る恐る
「な、なんですか…？」
と聞くと
「この事は誰にも内緒って事ととりあえず脱いでもらおうかしら」
こう返ってきた。それを聞いた未来は赤面している。
「ぬ、脱ぐって」
そこへ了子に
〈ギリギリ斬り〉
が飛んでくるがそれを了子が避ける。
「危な！なにすんのよ!?」
「いい加減言い方を変えろ！ただの身体検査で変な誤解しまくられてるじゃねぇか!?それともなんだ!?アンタはレ○○○○なのか!?」
「規制が入る事をいうな!!」
「じゃあなんとかしやがれ!!」
と口論が続くが流石に騒ぎ過ぎたのか了子と響の頭に弦十郎から拳骨流○群が飛んできた。

「騒ぎ過ぎだ」
「「すみませんでした!!」」
こういう時だけ息ピッタリな二人である。そのまま未来は身体検査を受けて帰らされた。のだが
寮，未来の部屋
「デ?ナンデ響ガイタノカナ?」
そこでは未来が笑いながらハリセンを持って響を正座させていた。ここで1番怖いのは笑っているのに目が漆黒に染まっている３９３である
「あのぉ未来さん?なんか暗黒微笑がもの凄いんですけど?」
「私ハ響ニ喋ッテイイナンテ言ッテナイヨ?」
そう言って響を引っ叩き床に叩きつける。響はそれでもすぐに姿勢を整え正座する。
「いや、あの実は……」
理由説明中
「……という訳でして」
響はもの凄い量の冷や汗を流して弁明している。それを聞いて未来は納得して響を許した。条件付きで。その条件はまた別の話で
そして響はそのまま家に帰りそのまま寝てしまった。

翌日

「と、いう訳で検査結果が出ました～！」

検査の結果未来の身体はそこまでバックファイアは受けておらず大丈夫との事だった。

「でも～、未来ちゃんが知りたいのはこんなことじゃないわよね！」

その言葉で未来の脳裏に昨日纏ったシンフォギアが思い浮かぶ。

「教えてください！あれは何ですか！」

「急かさないの！翼ちゃん。あれ、見せて」

鼻息荒げに聞いてきた未来をなだめ了子は翼にペンダントを取り出させ説明を始める。

（※原作と同じなので飛ばします。気になる人は原作見てね！）

「と、こんな感じね。なにか質問はあるかしら？」

そう言われて未来はおずおずと手をあげそれを了子が指差す。

「はい！未来ちゃん！」

「すみません。全然わかんないです…」

未来は申し訳なさそうにそう言って了子はコケて肩落としている。その他の人は「だろうな」「ですよねー」と言って納得していた。

「と、取り敢えずシンフォギアを作る技術『櫻井理論』を作ったのが私ってことを覚えてれば大丈夫だから」
了子は気を取り直しそう告げると入れ替わりで弦十郎が口を開く。
「未来くん。二課に入ってほしい！」
だがそれに反論する者がいる。奏と翼だ。
「ちょっと待て旦那！未来は一般人だ！アタシらの戦いに巻き込む必要はない！」
「私も同感です」
「ふむ、響とクリスはどう思う？」
「６：４だな。入って欲しい気もするがそうなると戦闘技術を教え込まないといけないし、逆に入らない場合身辺警護は必要だろう。シンフォギア装者はこの世で今のところは日本にしかいないからな。だがそもそも入るか、入らないかは未来が決めることだ」
響の言葉にクリスも頷いて賛成する。未来は決める。
「私、やります！なんでもない日常を守るために！」
「わかった、喜んで君を歓迎する。小日向未来くん。ようこそ、二課へ！」
響は未来に目を向けると覚悟を決めた戦姫（ヴァルキリー）の顔をしていた